

C-2. 梨の成長を通じての気づき 赤碕保育園(鳥取県東伯郡)〈3・4・5歳児混合クラス〉

事例4 そらぐみ「梨の成長を通じての気づき」(3、4、5歳児)

4月17日、クラスの子どもたち(3・4・5歳児異年齢混合クラス)で保育園の周辺を散歩していると、梨の花が満開で「わー、きれい」とみんなが足を止めた。「何の花か知っている?」と尋ねたところ、意外と知らない子どもが多かったため、赤碕の特産でもある梨のことを知らせていきたいと思い、この梨の花がどうなっていくのか子どもたちと見ていくことにした。

◆保育士の願い、援助、環境構成 ●子どもの姿・つぶやき、発言

1. 梨の木との出会い

最初に梨畑に行ったとき、枝を触ったり機械を触ったりするので、梨畑のおじさんに注意を受けた。なぜ、いろいろなものをつついてはいけないのかを子どもたちと話し合ったところ、「大事なものだけ、いけん」また「人の家のものだけ、いけん」という声があがった。

梨作りを仕事として暮らしている人があることを知らせ、仕事の迷惑にならないよう気を配りながら、梨の成長や仕事の様子(世話)を見せてもらい、話を聞かせていただくことになった。



2. りんごの木に気づく(5月上旬)

◆梨の成長に、関心を持っている様子だったので、子どもたちにも見たり聞いたりしたことを生かして同じような経験をさせたいと考えた。園庭のりんごの木を世話することで疑似体験し、梨を身近に捉えることができるようにと考えた。自分たちで考えながら、経験を重ね、作物の育ちや収穫の喜びを感じさせたいと願った。

●そのころ梨の花から2週間くらい遅れて園庭のりんごの花が咲き始めた。子どもたちからの気づきを待ったが、声があがらなかったため、こちらからクイズを出してみた。「保育園の園庭にも実のなる木があります。さあ、何の木でしょう?」と言うと、早速園庭に出て、いろいろな木を見て回り、栗や山桃、りんごの木を見つけた。そして、りんごの花が咲きかけているのを見て、子どもたちのこんなやりとりがあった。

「この木って実がなるか?」「花粉つけんといけん、花粉がいる。」「ハチからもらうじゃないか?」「そのままほっとけばなるよ。」

しばらく自分たちの考えを出し合いながら話していたが、話はまとまらず、「やっぱり分からん。」とその日を終えた。

次の日、りんごの木を見つけた子どもたちが、クラスの1部の子どもたちに、りんごの木があったことを話していた。この姿を受けて、朝の会の中で、子どもたちが気づいたことを伝える場を設けた。以降、子どもたちのいろいろな気づきや不思議に思ったことなど、クラス全体の場で知らせていくようにした。

●「どうしたら実がなるのか?実がなるとしたらりんごの木を世話していくのか?」についても話し合ったところ「もし、実がついたらクッキングができるかもしれん!」という期待から、りんごの木の世話をしていくことに決まった。どうしたら実がなるのか?については、りんごにも花があったことから、もう1度梨畑に、話を聞きに行くことになった。梨畑の人から、交配すると実ができることを教えてもらい、保護者の方のお世話になってりんごの花粉をもらい、園庭のりんごの交配を行った。以降は間引き、袋かけ、シベつけ、水やりの様子を見させてもらい、何のためにそれが必要なのか聞き、同じようにりんごの木にも必要か考えながら世話をしていた。

●袋かけは、袋に名前を書き1人1枚づつかけた。名前付の袋をかけてからは、子どもたちの関心がさらに深まって、度々りんごの木を見にいっては大きくなっているか触ってみていた。

●このような経験により、園庭にある他の木にも興味・関心を示した子どもが数人いた。「この木は何の木だろう?」と、木の実を拾ってきたり、葉っぱを拾ってきたりして、図鑑で調べていた。これについては、今後の展開を見守りたい。

◆部屋に梨やりんごに関するコーナーを設けて、子どもたちが拾ってきたものを置いたり、見たり、聞いたりしたこと、経験したことをまとめたもの、新聞や雑誌の切り抜きなどを掲示し、子どもたちの目に留まりやすいようにした。また、梨に関係する本なども置き、疑問に思ったことを調べることのできる環境を作った。

① 味わう(6月13日)

●間引きの様子を見せてもらうために、梨畑に行った。木の下には、間引いた梨がたくさん落ちていて「持ってかえりたい」と子どもたちが言い、拾って帰った。

～包丁で切って食べてみた(近くにいた子が集まって来る)～「にがい!」「さくらんぼの青いののにおいがする」「まずい!」

◆こんなやりとりと味見の後「梨は、いつから甘くなるの?」という疑問へと続き、以降、梨畑に行く度に梨を拾って帰り味見をした。

7月1日「ざらざらしてまずい」。7月30日「少し甘い、梨のにおいがする」。8月12日「おいしい!もう食べれる。汁もいっぱいある」

◆このとき保育者には、まだ食べれないという先入観があったが、子どもの食べれるよ、食べてみようという姿に向き合ってみて、こうして試していくことが、子どもたちにとって、とても意味のあるものであることを、改めて感じた。子どもの気持ちに寄り添い、共感し、答えを急がず、子どもの声を大切にしていきたいと感じた。

② 大きさ

◆1回目(6月)に拾って帰った時よりも2回目(7月1日)、3回目(7月30日)と梨の実が大きくなっているのを見て、「わー、この前よりも大きくなるとるな」と子どもたち。「このくらいかな」と手で大きさを表したり、「さくらんぼが膨らんだくらい」と言葉で大きさを表したりしていた。「大きさを比べるにはどんな方法があるだろう?」の問いには「目で見る」「触ってはかる」の他に「数字の書いてあるのでせんといけん」と言った子があり、メジャーで測ってみることにした。これまでに拾った梨の実の大きさを粘土で作って残っていたので、それも測ってみた。

◆数字で大きさを比べることが、どれだけ意味があったかは不明であるそれよりも残してきた粘土と拾ってきた梨の実を比べてみるほうが分かりやすいようだった。子どもたちは、手や言葉など、いろいろな方法で大きさを表現しようとするので、その姿を大切にしたいと思った。



③ 図書館に調べに行こう(8月6日)

◆梨畑に行く度に落ちていた梨があり、園庭のりんごも次々に落ちてしまうのを見て「何で落ちてしまうんだろう?」と残念がる子どもの姿があった。また、りんごの木の下葉っぱが、日に日に枯れて落ちてしまうのを見て「何でだろう? どうしたらいい?」と心配していた。「分からないことを調べるためにはどうしたらいいだろう?」と投げかけてみたところ、他クラスが図書館に行ったことを受けて「図書館に行って調べる!」と声が上がった。

◆年長児7名が図書館に行ってみたが、梨やりんごに関する本がほとんどなく、疑問について調べることができなかった。

◆園に帰って「図書館に行っても分からないことはどうしたらいいのだろう?」と尋ねてみたところ、「選果場に行けば分かるんじゃない?」と案が持ち上がったので、選果場へ行く計画を立てた。

その他の活動

① 収穫したりんごを使ってのクッキング

◆りんごが大きくなることをとても楽しみにして、たびたび触っていた子どもたちだったが、ある時期から「なんか、全然大きくなってないよ」と気づいて保育者に伝えた。そればかりか、次々とりんごが落ち始めた。自分のりんごが落ちるともったいなくて、いくら小さいりんごでも食べていた。しかも、みんな黙々と食べるので、保育者も味が気になり子どもに聞いてみると、「ちょっとすっぱいけど、あまい味」と答えた。少し分けてもらって食べてみると甘くて熟しているようにも思われる。子どもたちも保育者も、大きなりんごができると想像していたが、違うかもしれないことに気づいた。そこで、りんごの種類について調べるため、子どもたち(年長7名)とスーパーに行ってみるが、お店には大きいりんごしかなく、お店にあったもの以外に種類はないのか、その日の宿題となった。後日、小さいりんごがあることを家の人に聞いてきた子があり、このりんごがそうかもしれないと、園長先生に確認した。このりんごは、これ以上大きくならない姫りんごであることを知ると、早速、収穫をしようとした話がまとまり、収穫したりんごを使ってクッキングをした。

② りんごの収穫とお礼の手紙(8月16日)

◆今回りんごの世話をするにあたって、保護者の方に花粉とりんごの袋を分けてもらっていたので、何かお礼をしたと考えていた。そこで子どもたちにこんな投げかけを試してみた。「りんごがたくさんできてよかったね。このりんご、何でこんなにたくさんできたと思う?」すると、子どもたちからは、自信満々に「ぼくたちが世話をしたけ!」と返ってきた。そこで、これまでどんな世話をしてきたのか振り返り、それらは全部自分たちの力でできたのかを考えてみた。お礼のお手紙を書くこと、切手が必要なことに話がまとまり、郵便局に切手を買に行き、手紙を出すことになった。



考察

この梨の活動を通して、地域にでかけ、たくさんの人と触れ合い、自分たちの住む町を知るよききっかけになったと思う。また、保護者にクラス便りなどで子どもたちの活動やつぶやき、疑問など伝えていったので、家から本を持たせてくださったり、親子活動として二十世紀梨記念館にも行ってくださったりすることができ、地域と家庭との結びつきも深まった。自分たちの住む町を知り、この町を大切に、この町を誇りに思えるような子どもを育てていくために、これからもどんどん地域に出かけていきたいと感じた。

ポイント

地域の特産である「梨」を通して、地域の人や保護者とのがかわりが生まれています。園庭のりんごを育て、地域特産の「梨」の成長と結びつけることで、梨がより身近な存在となり、地域との交流にもつながっています。また、梨の成長を通して、味や大きさの変化を自分で体感したり、町に自分たちから出かけていくなど、子どもたちがいきいきと興味・関心を広げて行っている様子が伝わってきます。